

研究課題名 小学校体育授業における言語活動についての研究

-高学年児童の器械運動領域に着目して-

研究代表者 松本 健太

昨今の日本では、グローバル化や知識基盤社会の到来、少子高齢化の進展など社会が急速な変化を遂げており、教育の重要性がますます高まってきている。一方で、国内外の学力に関する調査から、我が国の児童生徒の思考力・判断力・表現力に課題があることが報告されている。これらの課題を解決すべくいくつかの学習活動が示されたが、それらの学習活動の基盤になるのが言語であり、言語を通して思考力・判断力・表現力等の育成が重要とされている。

本研究では、器械運動領域における高学年児童の言語活動の実態を明らかにする。さらに、その実態から言語がなぜそうなっているのか要因について検討することを目的とした。

本研究は、2016年9月9日から10月25日にかけて、千葉県のX小学校で行われた5年生2クラスのマット運動1単元を対象とした。そして、その中から運動技能水準上位児（以下、上位児A、上位児Bとする）、運動技能水準中位児（以下、中位児C、中位児Dとする）、運動技能水準下位児（以下、下位児E、下位児Fとする）それぞれ2名ずつ計6名を選定した。

なお、抽出児の選定については、平成28年度に行われた新体力テストの結果及び単元前後で行った、運動有能感テストの結果を参考に授業担当教師と協議の上、選定した。

その結果、児童の技能差によって発言の回数に差が大きく出るという実態が確認された。さらに、抽出児の事例的な分析から自分が得意とする技については、発言回数が多くなり、自分が苦手とする技では発言回数が少くなる傾向があることも示唆された。

ただし、今後の課題として児童の言語について研究していく上で、その児童がどのような知識をもち、どのような思考判断をして、発言をしているのかを言語と知識や思考判断の関連から分析していく必要があると考える。